

横浜市小学校社会科研究会

3学年部会

## 研修会記録

第 5 号

令和5年 12月1日

横浜市小学校教育研究会

会長 濱田 哲也

横浜市小学校社会科研究会

会長 加藤 和之

同 学年部長 権正 倫範

【提案日時】

10月 4日（水）

提案 田倉 直哉 先生（茅ヶ崎小）

【会 場】

横浜市立平沼小学校

司会 藤田 秀悟 先生（田奈小）

記録 小池 智宏 先生（鴨志田第一小）

### 1 提案内容 単元名

単元名「農家の仕事～横浜が誇る小松菜を育てる スーパーマンKさんのひみつをさぐれ～」

### 2 提案者より

#### ○研究会主題について

視点①子どもが問いや見通しをもち、主体的に学ぶ単元づくり

#### ずれと本物との出会い

- ・自分たちが住んでいる都筑区で農業が盛んであるということ、児童は把握していない  
→横浜の農地を白地図にまとめた後、「農地が多い区ランキング 2位都筑区」「農家の数が多い区ランキング 1位都筑区」であることを提示  
なぜ？調べたい！につながった。

#### 問いからインタビュー計画を立てる。

- ・実際に農家の方へ話が聞くことができることを伝え、それぞれの問いや聞いてみたいことを集約し単元の構想を行う。青梗菜を作っていることには触れないように打ち合わせをし、青梗菜を作っている事実は第6時に提示した。

視点②個を生かし、協働的に学びを深めるための手だて

#### 個人のめあての設定と振り返り

- ・学習の内容だけではなく、今までの学習を経てどのように学んでいきたいか個人のめあてを設定する。そうすることによって個人での学び方の成長をメタ認知できるようにしていきたい。
- ・一人ひとりのよさや可能性が高まり、それが生かされる姿をねらう。  
特にB児とC児に注目し、個人のめあてに沿ったコメントや声かけを行った。  
B児「ほかの人の話を聞いて、自分の意見を話したい。」  
C児「いろいろ考えて発表をする」  
→めあての設定により、個の活躍が活発になり、協働的な学びの深まりにつながった。

#### ○本時について

- ・「Kさん以外の農家が青梗菜を作っていないという話から、Kさんが青梗菜をつくることで、地場産の野菜が私たちの手元に届く」→児童の発言から捉えてほしかったことを正確に捉えていない様子。
- ・「地域の仕事と地域の人々の生活のつながり」を児童の実態にある実感の伴った理解につながるにはどうしたらよかったか。

### 3 協議会

視点①子どもが問いや見通しをもち、主体的に学ぶ単元づくり

- ・青梗菜という材をより身近にするには、もう一つ手立てが必要だったのではないかな。
- ・青梗菜との出会い方、課題にあるようにやや唐突な出会い方となっていた。
- ・青梗菜は地域と農業のつながりを強調する材として取り上げられた。生産活動であるので、生産活動と地域の生活とのつながりがより明確になると、とらえやすいのではないかな。

視点②協働的に学びを深めるための手だて

- ・ふり返り…めあてに関するふり返り、内容に関してのふり返りがあった。
- ・めあてと自分自身での評価、協働的に学ぶ姿のイメージは難しいのではないかな。しかし、授業の中で、教師自身が価値づけすることで、ふり返って評価することができていたのではないかな。また、社会科を学ぶ視点をもって学習していくことが大切ではないかな。

<講師の先生より>

○六ツ川台小学校 山本 麻美 副校長先生

- ・子どもたちがよく考えながら学習していこうとする姿が感じられた。それに先生が応えることを大切にされている。3人の抽出児に願いをもち、見取りながら単元を展開することで、クラス全体もより見えてくるのではないかな。個を大切にしていくことはクラス全体を大切にすることにつながっていく。
- ・単元について  
農地が多い区で、自分たちの近くにも農家の方がいる。身近に感じることは特に3年生で大切になる。ビデオや写真で視覚的に、実感をもって分かるようにしていた。数や都筑区に農地が多いという提示がよかった。自分たちの住んでいる地域で農地が多いことを白地図に表すことで、実感して捉えることにつながっていくのではないかな。  
インタビューもいいが、できれば畑を歩きながら見ることができるとより実感をもって理解することができたのではないかな。じっくりと見ることで、26児も小松菜と青梗菜の成長の違いに気づいていた。事実を捉えながら話している。農事暦や実際に見学したものが加わると、よりKさんに寄り添った言葉が出てきて、実感的に学ぶことができるのではないかな。小松菜と青梗菜の育て方を比較したり、数を比較したりしても考えられる。  
「理由は」「どうしてそう考えたの」と問い返すことで、より子どもたちの考えていることが引き出される。誰かの言葉を聞いて、「自分は～」とつながっていくのが協働的な学びになるのではないかな。
- ・「めあて」について  
めあてをもって学ぶことが大切ではある一方、どの教科でもではなく、社会科ではどうしたいか、どうしてどう思うかなどの、適切なタイミングと回数でもいい。
- ・「農家の人と地域の人々の生活」の実感を伴った理解について  
3年生ではいろいろなものを生産する人がいて、販売する人がいて、こういう風な思いで小松菜や青梗菜を作っているKさんがいて、買う人のことを考えて作っている。自分たちはそんな市に住んでいるという風につながり、難しくしすぎず、人と出会って自分たちの暮らしとの関わりや疑問を生み出しながら学習を解決していくことが大切ではないかなと思う。

<学年担当校長先生より>

○日枝小学校 加藤智敏 校長先生

- ・人々とのつながり  
私たちのまちにはKさんのような生産者がいるや、横浜市には同じように生産している人がいて私たちの生活とはつながっていることが理解できたらよい。横浜市の中には様々なものを生産している人たちがいてその人たち一人ひとりが工夫して生産していることが理解できればよい。